

〈論文〉

ワークショップ型研修の有効性に関する考察 ～北九州エマージェンシードリルを事例として～

Consideration regarding the effectiveness of workshop-type training
-Emergency drill in Kitakyushu as an example-

村 上 真 理*

Shinri MURAKAMI

福 西 和 幸**

Kazuyuki FUKUNISHI

楊 川***

Chuan YANG

川 脇 慎 也****

Shinya KAWAWAKI

要 旨

本稿では、UNGL（西日本学生リーダーズ・スクール）に加盟する九州国際大学が、毎年12月に開催する「北九州エマージェンシー・ドリル／KED」を事例とし、学生のリーダーシップ養成を目的とした実践型研修におけるワークショップ方式の、有効性ならびに可能性について検討した。具体的には、まずUNGLプログラムの概要とそこで用いられる主要な教育手法について整理・確認をした。そして先行研究のレビューを通じてこの種の研修における論点や課

* むらかみしんり／現代ビジネス学部／UNGL事業担当 murakami@cb.kiu.ac.jp

** ふくにしかずゆき／現代ビジネス学部／UNGL事業担当 k-fukunisi@cb.kiu.ac.jp

*** ようせん／現代ビジネス学部／UNGL事業担当 yang@cb.kiu.ac.jp

**** かかわきしんや／現代ビジネス学部／UNGL事業担当 kawawaki@cb.kiu.ac.jp

題を抽出し、令和5年度の「北九州エマージェンシー・ドリル」の在り様に考察を加えた。その結果、ワークショップ方式のメリット・デメリットを再確認したほか、特に大学生が取り組む防災活動と、そこで必要とされるリーダーシップの養成に関し、有意なインプリケーションを得たものである。

キーワード：リーダーシップ養成、防災啓発活動、ワークショップ、HUG（避難所運営ゲーム）、DIG（災害図上演習）

1 研究の背景と目的

急速にグローバル化の進む現代にあって、地域社会・国際社会を問わず、そこで活躍する人材に求められる能力は多様化・高度化している。さらには歴史や文化、習慣的な背景の異なるメンバー間での“リーダーシップ”についても、営利・非営利組織ともに、重要性が増す一方である。西日本学生リーダーズ・スクール（以下、UNGL）は、平成24年度に文部科学省の大学間連携共同教育推進事業に採択された『西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシッププログラム』（University Network for Global Leadership Development in West Japan）の実施主体である。そしてUNGLでは、現代社会において広く求められる「汎用的能力としてのリーダーシップ」を、実践を通じて養成することを目的としている。

筆者らが所属する九州国際大学は、このUNGLが発足した当初からの加盟校であり、後述する国内Basicプログラムの1つである北九州エマージェンシー・ドリル（以下、KED）をウィンタースクールとして開催してきた。この間、コロナ禍による中止や大幅な内容変更を余儀なくされる場面もあったが、概ねプログラムの目的を達成し、多くの参加学生にリーダーシップ養成の機会を提供してきた。

北九州エマージェンシー・ドリルは、地域における大学の拠点性と学生のマ

ンパワーに着目したもので、防災活動を通じての地域貢献と、自らも地域防災のリーダーシップを発揮し得ることを目途とした、シミュレーション型のプログラムである。しかしながら、このところの災害規模の大型化や、防災ニーズの多様化を受け、プログラムの内容の見直しが繰り返し議論されてきたのも事実である。

むろん、防災活動の有効性は、実際に災害が発生しなければ明らかにならない。また、防災活動の充実と、防災リーダーとしてのリーダーシップ養成とは、同列において評価すべきものでもなかろう。それでも、UNGL発足から10年となる令和5年度のKEDの内容を振り返り、以降のプログラムのあり方やより効果的なリーダーシップの養成手法について検討することには意味があると思われた。本稿では、あらためてUNGLプログラムの主旨や目的、学術面からのアプローチ等について確認した後、令和5年度の北九州エマージェンシー・ドリル(KED2023)における新たな試みについて検証するとともに、その効果や今後の課題について整理する。

2 西日本学生リーダーズ・スクール (UNGL) の概要¹

2.1 プログラムの構成ならびに教育手法

リーダーシップの養成において、参加学生および教職員に対し効果的な学びの場を設けることは、正課教育の枠組みの中では難しいとされる。そこでUNGLでは、正課教育から得た知識や理解を実践的な知恵へと変換するための「準正課教育」プログラムを志向している。類似のものに正課外教育があるが、準正課教育は、教職員がより積極的に活動内容を設計し、一定の責任をもって適切に関与・指導を行う点で大きく異なる。それゆえUNGLは、プログラムを実行する学生はもとより、教職員が学生を支援するための能力やスキルを向上させる機会ともなる。このようなOJT型プログラムを前提とすることは、UNGLにおける特徴の1つとなっている。

さらにUNGLでは、大学生の効果的な学びを実現するため、①国内での各種研修／BasicProgram、②2国間での異文化研修／Intermediate Program、③多国間での異文化研修／Advanced Programを段階的に展開する。学生はこれらを通じ「学内・国内→2国間→多国間」という流れにおいて、継続的かつ体系的にリーダーシップを養うことができるのである。

また、各プログラムでは、学生の能力開発を担う知識やスキルを持った教職員、共に行動する学生同士、学生自身、という3つのフェーズによる「振り返り：reflection」の時間が設けられる。丁寧な観察に基づく教職員からのフィードバック、学生同士の振り返り、そして個人レベルでの省察は、自己の認識度や課題を明瞭にし、さらなる取り組みへのモチベーションを高めるうえで高い実効性を期待される。

2.2 振り返り：reflectionの実際²

UNGLが学生のリーダーシップを養成する上で特に重視しているのが、効果的な振り返り：reflectionである。具体的には、経験や体験をそのままにすることなく、それらを丁寧に思い返し、その中から、次の機会に活かせる知識や教訓を導き出す手法である。これはリーダーシップを養成する上で、とても有用なものと位置づけられる。さらに、その効果を高めるためには、振り返りを促すパートナーの存在が欠かせない。

基本的にUNGLプログラムに参加した学生は、まず目的・目標を明確にしたうえで活動を開始する。そしてプログラムの最後に、教職員や研修をサポートする学生スタッフからのフィードバックを材料として、振り返りを行う。そこでは活動において「できたこと」「できなかったこと」が確認されるのみではない。より深みのある自己との対話が促されたことで、それができたのは「なぜか」、できなかったのは「なぜか」、次の機会に活かせる教訓は「何か」等といったことが明確化されるのである。

2.3 目標の設定と振り返りの視点

UNGLプログラムでは、振り返りと並んで目標設定も重要な要素と位置づけられる。これは、いわば振り返りと対になった概念ともいえる。具体的な目標としては、数値化・数量化できるものは「測定可能な値」で設定すること、それができないものは、設定した本人やチームメンバー、教職員・学生スタッフが見て「達成の有無や度合いを判断することが可能な基準」で設定することが求められる。とはいえ、不慣れな学生にそのような目標を設定することは容易ではないため、設定作業の段階から丁寧な説明と適切な促しが不可欠である。この点、プログラムの企画においては、もう一歩努力をすれば達成できるようなレベル感であることが重要でもある。³

しかし、目標設定が適切であったからといって、必ずしも効果的な振り返りが実現するというものではない。UNGLでは「手法的な視点」と「行動変容的な視点」という2つを設け、効果的な振り返りの実現を目指している。ここでいう手法的な視点とは、振り返り時に使用した手法が、学生本人のみならず、本人を含むチーム全体にとって効果的であったか否かを見るものである。振り返りをサポートする学生スタッフは、学生本人の振り返りのみから成否を判断する傾向があるとされる。このため学生スタッフ・教職員が一緒になって、平衡の取れた見方を保つようにしなければならない。

行動変容的な視点については、さらに「1日の活動を振り返り、翌日の改善に活かすことができるか?」「研修後、学生の日常生活にどのような変化が生じるか?」という2つに分けられる。前者については、プログラムの開催が複数日におよぶ以上、各日の振り返りを通じて確実な軌道修正を図ることを企図したものである。具体的には、研修課題に対する自分自身およびチームの取り組み状況について、達成事項と未達成事項とを仕分け、そのような結果となった理由を確認する作業が中心となる。言い換えれば、ルーチンワークとしての反省会なのだが、限られた日程においてプログラム目標を達成するためには欠かせないプロセスである。

後者については、プログラム実施期間中に振り返りとして実施することは困難だが、振り返りの手法と目標設定の主旨を勘案すれば、ある種の必然性をもって取り組むべきものであろう。実施にあたっては、プログラムに学生を引率した教員が中心となり、所属大学での諸活動におけるUNGLプログラムの影響や効果等を測定・観察することになる。その大学からの参加学生が少なかった場合は体系だった対応にはならないことに加え、オリジナリティの高いものとなるため、実施は容易ではない。しかし、振り返りの主旨からすれば不可避のプロセスではある。

2.4 各種プログラムと北九州エマージェンシードリル

前述のとおり、UNGLでは学生の効果的な学びを促すため、①国内での研修／Basic Program、②2国間での異文化研修／Intermediate Program、③多国間の異文化研修／Advanced Programを段階的に展開している。このうちのBasic Programには、当初から定番となっている3つのプログラムがある。すなわち、愛媛大学の主催で毎年9月に実施される「サマースクール」、京都外国語大学による3月の「スプリングスクール」、そして九州国際大学が12月に開催する「ウィンタースクール」である。これがKEDと呼ばれる北九州エマージェンシー・ドリルで、令和5年度実施分は「KED2023」の略称で呼ばれる。

これまでKEDでは、防災活動への取り組み意欲の醸成ならびに地域における防災リーダーの養成を一貫して目的としてきた。ちなみに9月に実施されるサマースクールでは、過去に無人島でのサバイバル生活といったテーマが、3月に実施されるスプリングスクールでは、外国人とのコミュニケーション交流といったテーマが設定されたことがある。このように3つのスクールは内容的に差別化が図られ、学生にとってはそれぞれに興味を喚起されるようになっている。しかし、サマースクール、スプリングスクールがともに長期休暇中の実施で参加しやすいのに比べると、KEDは学生・教員とも繁忙期にあたる12月の開催であり、関西や四国方面から北九州までの道のりも近いものではない。

このような背景から参加者確保が大きな課題となってきた。実際にUNGL加盟校からの参加者がなかった年もある。その時は北九州市内の大学（非加盟校）に声をかけ、急場を凌いだが、UNGLの主旨さらにはBasic Programの基本的要件を満たすものとは言いがたい内容であった。地域の防災リーダーの育成という目的においても、不十分であったことは言を俟たない。そこで後述するように、KED2023では「ワークショップ方式」を採用し、近隣に住まう高齢者や幼稚園児、中学生を対象とした防災講習を行う傍ら、参加者である大学生がそれをサポートするという方法に拠ったものである。

3 関連する先行研究

3.1 ジョハリの窓

本節では、これまでUNGLプログラムが学術面での根拠としてきた先行研究をいくつかレビューしたい。まずは、振り返りに関する「ジョハリの窓」である。これはJoseph LuftとHarrington Inghamによって考案されたもので、他者とのコミュニケーションを通じ自己理解を深めるためのツールである（Luft, J. and Ingham, H. 1955）。

Josephらは自己開示とフィードバックを通じた自己理解、成長に関する考え方をモデル化したのだが、これが後にジョハリの窓として知られるようになる（図1）。それによれば、自己には「開放の窓」「盲点の窓」「秘密の窓」「未知の窓」の4つが存在するという。そしてJosephらは、開放の窓は「自分も他者も知っている自己」、盲点の窓は「自分は気づいていないが、他者は知っている自己」、秘密の窓は「自分は知っているが、他者は気づいていない自己」、未知の窓は「誰からも知られていない自己」と定義している。

この区分に従うなら、他者とのコミュニケーションをより円滑なものにする上で、自分も他者も知っている自分（＝開放の窓）を拓げることは有効である。そのためには、まず他者に見せていない自分（＝秘密の窓）と、他者が知って

図 1 ジョハリの窓

自分自身が知っている		自分自身が知らない（未知）	
他者が知っている （未知）	I 開放の窓 公開された自己：open self	II 盲点の窓 自分は気付いていないが、他者には見えている自己：blind self	
	III 秘密の窓 隠された自己：hidden self	IV 未知の窓 誰にもまだ知られていない自己 ：unknown self	

出所：Luft and Ingham（1955）より筆者作成

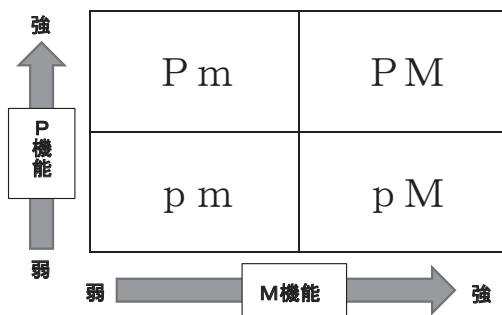
いて自分が知らない自分（＝盲点の窓）の領域を小さくするような努力が必要となる。では、どのような手段を用いれば、そうすることが可能となるのか。

そのための 1 つの方法が、自己開示である。他者へ積極的に自己を開示することで「秘密の窓」の領域が狭くなり、併せて「開放の窓」が開いてゆく。同様に、他者からフィードバックを受けることも「盲点の窓」の領域を縮小し、替わって「開放の窓」を開くことに繋がるのである。このように自己開示やフィードバック等を通じて他者と関わることで、新たな自分を知ることができ成長も促進される。このジョハリの窓は、UNGL プログラムにおいては特に参加学生の振り返りをサポートするスタッフ学生らが熱心に学び、ミーティングの現場で活用されてきた。

3.2 PM理論

PM理論とは、心理学者である三隅二不二の提唱したリーダーシップに関する行動理論である。三隅は、アメリカで行われていたグループ・ダイナミクスに関する研究に基づき、幅広い実験や調査を行った結果、組織体を有効に動かすリーダーシップを 2 つの機能に分類している。すなわち、組織目標を達成

図 2 PM理論



出所：三隅（1978）より筆者作成

する「P：performance機能」と、組織を維持しチームワークを強化する「M：Maintenance機能」である（図2）。ここでいうP機能とは、課題や目標達成までの計画を明示する、指示や命令を的確に与える、手順を整えて無駄を省く等といったものである。M機能とは、チーム内の緊張を和らげる、組織のメンバーを信頼・支持・理解し認める、メンバーを公平に扱う、メンバーの意見をよく聞く等といったものである（三隅、1978）。そして両機能の高低によりリーダーシップはPM型、Pm型、pM型、pm型の4つに分類された。

さらに、排斥不安が高い状況におけるリーダーシップ行動が集団の情報処理に及ぼす効果についても検討された（渥美・三隅、1989）。それによるとリーダーシップがP型行動のみの場合よりM型行動のみの場合の方が、優れた情報処理が行われることが明らかになったという。それはM型行動が実験参加者の緊張緩和に大きく作用したためである。また、P型行動にM型行動を併存させた場合には（PM型）、P型やM型を上回る情報処理が行われることも示された。ここからPM型がリーダーシップ行動としては最も適しているという結論が導かれている。

3.3 リーダーシップ研究

三神（2023）は、学校教師の組織的な人材育成に向け、2年目の教師がリーダーシップを発揮し、初任者教師へ学びを繋げる組織デザインを構想した。そして、若手教師同士が自律的に学び合う組織作りとの観点から、①「権限のないリーダーシップ」への理解、②初任者教師の役に立ちたいという想いと協働する姿勢、③「自分らしいリーダーシップ」への理解、④授業改善の知識・スキルおよびメンタリング方法、というテーマを設定した。それら要素を2年目教師が身に付け、初任者教師へ自己の学びを繋げる際、リーダーシップ行動の最小3要素である「率先垂範」「相互支援」「目標設定・共有」に基づき、自分らしいリーダーシップを発揮できるかどうかに注目したものである。

ここでは、活動のプロセスが、第1段階：授業改善に向けた授業デザインを学ぶ活動、第2段階：授業改善に向けた授業実践、第3段階：リーダーシップ発揮に向けた活動、の3つに分けて捉えられた。検証の結果、リーダーシップ教育を通じて、2年目教師がそれぞれ自分らしいリーダーシップ像を構築できたことが示された。特に第3段階において、2年目教師が初任者教師の授業実践を振り返る機会では、授業改善へ向け自分らしいリーダーシップ行動や「相互支援」「目的設定・共有」を意識した行動が現れたという。

野間川内（2023）の研究も興味深い。A大学の授業科目「リーダーシップ論」では、既修得者である学生スタッフと教員の協働による授業を行っている。学生スタッフは教員のサポートと受講学生の学びのサポートが主な役割であるが、学生の立場でありながら教員と協働することから、受講学生に与える影響は大きい。この点に注目した野間川内は、学生スタッフに対し受講学生の模範となる言動が取れるよう指導し、アクション・リサーチにより成長の過程を調査・考察した。

その結果、学生スタッフは、受講学生の成長に責任を持ちつつ彼らに接していることが確認された。そして、そのためには自らの考えや行動を変化させていく必要があると気づき、それに適応することで自らを成長させている。学生

スタッフがこれを実現できた背景には3つの理由があるという。1つ目は、学生スタッフというグループの存在である。7名の学生スタッフが、グループの一員として活動し、定期的に顔を合わせ議論することで、モチベーションを維持できた。2つ目は、学生スタッフに対する教員の姿勢である。学生スタッフは、学生でありながら受講学生に対し指導的行動をとる立場である。教員にとっての学生スタッフは、指導対象であると同時に受講学生を指導する仲間でもある。この点を踏まえた接し方が奏功した。

3つ目が、受講生が安心して活動できる場を作るという学生スタッフの理念である。ここで「受講学生のため～」という目的性が明示されているが、理念の策定以降、すべての活動が受講学生を意識したものになったという。学生スタッフによる理念が活動の軸となり、自らを導くものとなったのである。さらに、この理念が学生スタッフらの手によるということも重要である。UNGLプログラムでも、学生スタッフの存在と彼らによるサポートは欠かせない要素だが、ここでのように学生スタッフ自らが理念を策定し掲げることは注目すべきであろう。

3.4 UNGLにおけるリーダーシップ

リーダーシップは、大学の講義においても『ビジネス・リーダーシップ論』などの科目で取り扱われている。そこではJohn P. Kotter (2012)を引用するなどして、変革期における企業組織のリーダーシップが論じられる。また、社会経験の少ない学生には、リーダーシップとマネジメントの違いがよく理解されていない。このため、マネジメントは既存のシステムの中で課題を達成する能力や取るべき行動であるのに対し、リーダーシップは変革を実現する能力であることが強調される。Kotterによれば、環境変化が目まぐるしく、常に変革が求められる現代の大企業のマネジメント層には、リーダーシップが欠如しており、それが企業の変革を妨げる根本的原因になっているという。

一方、UNGLにおけるリーダーシップは「チームの目的・目標が円滑かつ迅

速に達成されるよう、メンバー間の効果的な協働を促す上で必要な知識やスキル、態度」と定義されるものである。その対象は「チーム」と標記されるのみで、企業組織など特定の組織形態を前提としたものではない。換言すれば汎用的なリーダーシップであるが、リーダーに求められる知識やスキル、態度といったものを、短時間のうちに体得することは困難である。そこでUNGLでは、そのようなリーダーシップを在学中に統合的に養成することを目指している。

なお、以下はリーダーシップの要素であるマインドとコンピテンシーにかかる、UNGLとしての公式の捉え方である。

〔リーダーシップ・マインド〕

さまざまな組織や集団においてリーダーシップを発揮する際に必要となる基盤的姿勢・態度。自己と他者の関係性を理解し、グループの中で自分の役割を真摯かつ誠実に果たそうとする態度などが含まれる。

〔リーダーシップ・コンピテンシー〕

- ①アクション力 … 目的・目標に向かって確実にやり抜く力。プレゼン能力、企画力、課題発見力、判断力など。
- ②チームワーク力 … 目標に向けて、他者と責任・権限を共有しながら協働する能力。クリティカルマインド、統率力、義務分担力、対話促進力、規律性など。
- ③セルフ・リーディング力 … 成長のために常に目標を掲げ士気を保ちながら、自己を導く力。自己認識、順応性、ストレス管理能力、自己啓発力など。
- ④市民性・社会性 … 社会の構成員としての意識を持ち、社会の相互依存性を理解し、互いの利益を目指す力。

3.5 ワークショップ⁴

一般にワークショップとは、参加者の主体性を重視した体験型学習会のことをいう。本来は作業場や仕事場を意味する言葉だが、転じて、参加者が共同で研究や創作を行う勉強会や研究集会などを指すようになった。多くの場合、フ

ファシリテータのサポートにより、与えられたテーマや課題についてグループ内で意見交換や共同作業を行う。但し、あくまで主役は参加者であって、個々人が主体的・能動的に学ぶ姿勢が重要である。

最近では、ワークショップは様々な単位における多彩なシーンで活用されるようになった。例えば社会教育の領域では、自然環境や行政、まちづくりなど社会的な課題をテーマとしたものが各地で盛んに開催されている。企業のビジネス研修でも積極的に取り入れられており、新人研修やマネージャー研修、役員研修などがワークショップ方式で行われることが少なくない。さらに、社会学や心理学などの学術分野においても、ワークショップによる研修会の有効性は知られている。

ワークショップ方式のメリットであるが、参加者が主体性を有しているため、与えられたテーマに対し当事者意識が芽生えやすくなる。さらに、自らの体験を通して学ぶため、座学よりも理解が深まることに加え、参加者の疑問や不安に対しタイムリーに対応できるのもポイントとなる。また、メンバー同士で交流する機会が多く、自然なコミュニケーションの発生しやすいこともメリットである。一方、知らない者同士が集まるワークショップでは、参加者が緊張したり不安を感じたりすることがある。また、多くの時間を体験に費やすことから、理解を深めるには効果的だが、幅広い知識を習得することにはあまり向いていないともいわれる。

4 KED2023の概要

4.1 過去の経緯と今回の開催規模

令和5年度の北九州エマージェンシー・ドリル(KED2023)は、12月9日の単日日程で実施された。さらに翌10日には、希望者のみを対象にエクスカーションとしてDIG(災害図上演習)にかかる勉強会を実施している。前述したとおり、ここ数年のKEDは実施時期が12月の繁忙期にあたることや、開催地

が北九州であることなどから参加者が少数に留まってきた。そこでKED2023では「ワークショップ」を採用し、大学近隣の高齢者や幼稚園児、中学生を対象とした防災講習を行うとともに、参加者である大学生がそれをサポートするという方法を採用した。

これによりイベントそのものに関与した人数は約80名となった。内訳はUNGL加盟校の大学生20名に対し、ワークショップ参加者は、高齢者向けDIG22名、中学生16名、ぼうさい絵本の読み聞かせとポシエット作成が6名（幼稚園児とその保護者ら）、教職11名である。さらに、主催校の学生スタッフを手伝うため、急きょ4名のUNGL・OBが来学した。また、J-COM北九州の取材クルーが、ワークショップを巡回しながら撮影とインタビューを行ったことで、一定の緊張感やある種の華やかさがもたらされている。

このような人数規模であったため、傍からは「大勢が参加するイベント」と見えたようである。むしろ、それはイメージしたことではあったが、言い換えれば、地域のイベントとして出来上がっている防災講習会に、連携校からの参加学生が加わることでUNGLプログラムとしての体裁を整えたものでもある。この点、今後に向け再検討を要するであろう。

4.2 基調講演

開会式の後、午前中の約2時間をかけ、防災の専門家3氏による基調講演を行った。これは単なる座学ではなく、午後のワークショップに向け、参加学生の取組み意識を高めることを狙いとしたものである。とはいえ内容は3者3様であり、参加学生の事後アンケートを見ても、相応のインパクトをもって受け止められたようである。3氏の基本情報と演題は以下のとおりである。

基調講演①「北九州市の防災の現状について」

北九州市危機管理室 危機管理課 防災企画係長 中村慎一郎 氏

基調講演②「自助と、事前の共助」

岐阜大学 清流の国ぎふ防災・減災センター 特任准教授 村岡治道 氏

基調講演③「怖くない防災を子供たちに伝えたい」

おいしい防災塾 代表 西谷真弓 氏

4.3 ワークショップ 第1会場「高齢者向けDIG」

ここでのテーマは、自宅周辺のDIG（災害図上演習）である。対象者は九州国際大学に最寄の尾倉市民センター管内の住民で、市民センター内の掲示板で告知、さらにセンターのスタッフから呼びかけをした結果、22名の参加をみた。平均年齢は約73歳、性別比は男性9名、女性22名である。なお、令和4年以降、九州国際大学の地域防災リーダー育成プロジェクト（以下、防災PJ）が講師を務め「防災講座 in おぐら」という防災イベントを、2度にわたり開催してきた。これにより一定の安心感が醸成されていたためか、今回の参加者の多くは防災講座の受講者でもある。

具体実施事項としては、災害時、自宅から正規の避難所である尾倉市民センターまでをいかに安全・迅速に移動するかについて、5つのグループに分かれ討議した。資料には北九州市が区ごとに作成したハザードマップを用い、その見方を確認した後、尾倉市民センターを中心としたエリアにかかる危険箇所について意見交換をしている。ファシリテータは、防災PJの顧問が務めたが、参加者とのやり取りの大半は、5グループに1、2名ずつ配置された大学生が担った。対象者の中には視力の低下している者もあったため、細かな記述を代読して説明するといったこともなされている。このようなプロセスも含め、大学生らは短時間のうちに信頼を得、スムーズな支援ができていた。

4.4 ワークショップ 第2会場「中学生向けHUG」

テーマは、中学校を避難場所としたHUG（避難所運営ゲーム）である。対象者は九州国際大学附属中学校の1年生・2年生の16名で、同校の大峯一純校長を通じて参加を募ったところ、生徒会の新旧役員が中心となり応募があったものである。この16名が4つに分かれグループワークに取組んだ。ファシリ

テータは、午前の部で「自助と、事前の共助」との演題による講演を務めた村岡治道氏が引き続き担当した。当初、北九州市八幡東区枝光にある付属中学校を舞台としたHUGを考えていたが、生徒の住所地がそれぞれ異なり、最寄りの中学校区で避難所運営に関わる可能性を考慮した結果、村岡氏オリジナルの中学校用HUGを採用している。

具体的には、各グループに中学校の「見取り図」と作業シートである「敷地平面図」を配布し、村岡氏の誘導に従って、①区画割りの検討、②拠点設置箇所の検討、③避難者への配慮の検討、の順に進めた。なお、中学生は午前の基調講演を聴講していなかったため、岐阜県における事例などを大型スクリーンに投影し、解説および補足説明を聞きながらの作業となった。どのグループもディスカッションは非常に活発であり、限られた時間ながら、避難所の間取り図は精緻なものが出来あがっている。そして、午前の部で村岡氏の講演内容を理解していた大学生が、このワークショップで村岡氏が意図した到達目標をいち早く理解し中学生をリードした点は特筆されよう。

なお、後掲【資料2】のとおり、中学生のワークショップに対する満足度はとても高いものとなっている。また、後掲【資料1】のとおり、このワークショップをサポートした大学生の振り返りにおいても、肯定的評価によるコメントが目立つ。ディスカッションが行き詰った場面では、議論が自然に再開するよう工夫をこらした大学生もあり、プロセス全体を通じてUNGLプログラムならではの良さがもっとも発揮されたのが、このワークショップであったと思われる。

4.5 ワークショップ 第3会場「ぼうさい絵本の読み聞かせ&防災ポシュエット作り」

このワークショップは、他の2つとは趣が大きく異なるものである。九州国際大学の防災PJでは、この2年あまり、幼稚園児や小学校低学年児童をターゲットに、子ども向けの防災啓発に取り組んできた。この中で上梓したのがぼ

うさい絵本『りのちゃんと、ぐらぐらおおじしん』であり、その読み聞かせや配布を通じ、共助意識の醸成と、子どもが語り部となつての活動の広がりを目指したものである。ワークショップでは、ぼうさい絵本の読み聞かせだけでは時間的に短すぎることから、過去のKEDで実演指導を受けたことのある「防災ポシェット」の作成指導を加え、子どもやその保護者にとって楽しみながら学べるイベントとした。

ワークショップの参加者は、大学最寄の華頂幼稚園（北九州市八幡東区春の町／芳賀喜代美園長）の園児・保護者に案内したところ、2家族からの応募があった。また、防災PJのメンバーにベトナム人留学生がいるため、ぼうさい絵本にはベトナム語版も用意されている。そこで北九州市ベトナム人協会に協力を要請し、1家族の参加が実現した。参加者は少数にとどまったが、プログラム運営には支障はないと判断し、この人数で実施することとした。なお、防災ポシェット作成のファシリテータは西谷真弓氏（おいしい防災塾代表）と、北九州市一円で子供向け防災啓発活動を展開している村上知子氏（しあわせプロジェクト北九州代表）に依頼している。

ここで西谷真弓氏は、午前の基調講演を聴講していなかった3家族に対して「怖くない防災を子供たちに伝えたい」というテーマを明確化した。その上で、震災時の自身の経験に基づき、子供たちが慣れ親しんでいる菓子を使った防災講座の意味・意義を伝えていた。また、子供たちにとって判りやすいクイズ形式が用いられ、これが防災への理解をさらに深めていたように見受けられた。その後、西谷氏・村上氏のサポートのもと、このワークショップの目玉である防災ポシェットの作成に取り組んだ。なお、いずれの家族も、両氏だけでなく大学生とも交流をしている。そういった一連の様子から、子供たちの真剣さや交流することの楽しさといったものを、筆者らは第3者の視点により感じ取ることができた。しかし、後述のように、大学生におけるリーダーシップ養成の視点からすると「学生のサポートの在り方」や「学生とファシリテータとの連携・協働」には課題が残ることとなった。

参加学生の振り返りシート（後掲【資料2】のとおり）を見ると、学生によっては雰囲気馴染めなかった、何をサポートすればよいか判らなかった、といったコメントを寄せており、総じてワークショップの評価には難しいものがあることが明らかになった。その原因としては、1つにはファシリテータである西谷・村上氏のポシエット作成指導が熟練したもので、「西谷・村上氏 ⇄ 子供たち」の関係性に上手く絡めなかったことがあると思われる。いま1つは、絵本の読み聞かせを担う防災PJメンバーとの連携が上手く図れなかったことを挙げられよう。詳しくは後述するものの、課題の散見されるワークショップとなった。

4.6 エクスカーション

KED2023は単日日程のプログラムであったが、翌12月10日の午前中、希望者のみを対象にエクスカーションとしてキャンパスDIGにかかる検討会を行った。参加者は教職員5名と学生2名で、講師は村岡治道氏が務めている。但し、天候によってはキャンパス周辺の探索ができないため、今回はエクスカーションとはいいながら座学方式での研修会とした。そして、大学生を対象に実習形式で本格的なDIGを実施するにあたっての問題意識の設定、モチベーションの高め方、指導上の留意点などについて、深度ある情報共有が図られたものである。なお、当日の資料を【資料3】として後掲している。

このプログラムは結果として教職員を対象としたものになったため、ここではUNGLにおける教職員の能力開発について整理・確認しておきたい。過去のUNGLプログラムでは、大学生のリーダーシップ養成に取り組むとともに、それら学生の学びを支援する教職員スタッフを対象とした研修を実施してきた。その典型が「OJT型研修」である。プログラムを実施する際、教職員がチームを組み、経験豊かなスタッフがメンターとなって、各種アドバイスや学生指導の方法、振り返りの実際を共有化する。これは参加学生の学びに関与しつつ、教職員の能力開発やその向上を目指したものである。

一方では「Off JT型研修」も盛んに実施されてきた。これらはサマースクールやウィンタースクールといったプログラムとは、基本的に切り離して行われる。これまでの研修例としては、振り返り手法セミナー、市販の知育玩具を用いた振り返りの質を高めるための勉強会、研修プログラムの作り方講習、アイスブレイクに関する事例紹介、自大学でUNGLの安定的・継続的な運営を図っていくためのアイデア検討会などである。これらと並行し、リーダーシップ研修を円滑に実施するための各大学の体制についても、しばしば情報交換がなされてきた。

九州国際大学では、過去に「UNGL独自プログラム」と称し、スポーツサークルの主将など学内の様々なリーダーを参集したプレゼン大会を開催したことがある。また、毎年の大学祭に合わせて開催する「KIUプレゼンバトル」も、UNGL独自プログラムとして開始されたものである。このようなプログラムを通し、UNGLの教育理念や大学生のリーダーシップ養成に関する理論、また、それを指導・支援する教職員の能力や知識、態度等についての学修が展開されてきたのである。

5 研究方法

ここまでUNGLの概要を確認し、ついでUNGLプログラムが準拠する理論やリーダーシップ、ワークショップに関する先行研究等についてレビューした。UNGLは正課教育から得た知識や理解を実践的な知恵へと変換するための「準正課教育」プログラムを志向したものであること、そして学生のリーダーシップを養成する上で特に重視しているのが効果的な振り返りであることの2点は重要である。また、三神らの研究を参照することで、大学教育におけるリーダーシップ養成の興味深い取組み事例が明らかになった。これらを受けUNGLにおけるリーダーシップ・マインドならびにリーダーシップ・コンピテンシーの位置づけがより明確になったと思われる。

さらに、令和5年12月に開催されたKED2023についても、実施メニューの各項目を順を追って精査した。特に、午後の部で開催された3つのワークショップに対しては、参加学生の振り返りシートへの記述ぶり、対象者の事後アンケート（中学生向けHUGのみ）、ワークショップを担当した教員の感想などを中心に詳細を点検した。それらに加えて、翌日にエクスカージョンとして行ったDIGについても、UNGLにおける教職員向け能力開発の視点から適否を検討している。

以上の過程を通じ、以下の論点が抽出された。すなわち、①リーダーシップ養成にかかる効果的手法、②ワークショップ型研修の有効性、③UNGLプログラムとワークショップとの親和性、である。次節では、これら論点に基づき、あらためてKED2023を振り返るとともに考察を加える。そして、最終的に今後のプログラム運営に関する有意なインプリケーションを引き出していきたい。

6 考 察

6.1 事後アンケートの結果

図3は後添する【資料1】の参加学生による事後アンケートの結果を、可視化したものである⁵。KEDのテーマである「防災」が中心に座り、その周りを2023年度のキーワードが取り囲むように配置されている⁶。このことから、主催校の意図したテーマやそれに伴うキーワードは、おおむね参加学生に伝わったものと判断してよからう。さらに単語の集計データを見ると、その伝わり方や参加学生の受け取り方、あるいは惹起された興味・関心に強弱があることも判る。

表1は単語の出現頻度とスコアを一覧にしたものである。スコアは、TF-IDF法によって「出現回数だけでなく、重要度を加味した値」である。その値が高いほど、「テキストを特徴づける単語である」と位置づけられる⁷。これに

よれば、「防災」はスコア・出現頻度とも、その他の単語を大きく上回っている。その他の語の出現頻度をみると7～15回となっているが、スコアでは「防災グッズ」30.75、「避難所」20.24となっており、「防災」に次いで特徴的な単語となっている。両語は3つのワークショップに共通するキーワードである。それを踏まえるなら、KED2023における各ワークショップは、特に「防災グッズ」と「避難所」について参加学生の意識を高めることに一定程度の貢献があったといえよう。

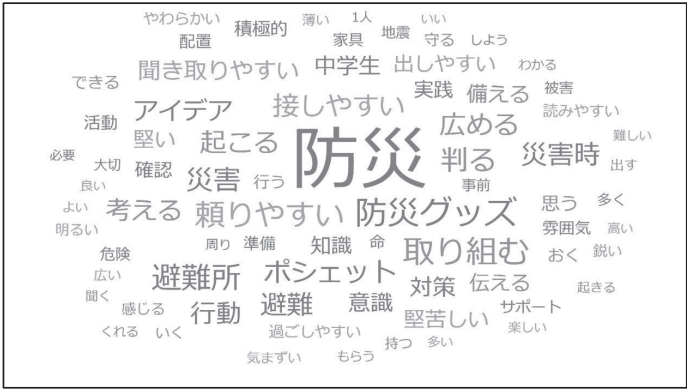
6.2 リーダーシップ養成にかかる効果的手法

UNGLの目指すリーダーシップとは「チームの目的・目標が円滑かつ迅速に達成されるよう、メンバー間の効果的な協働を促す上で必要な知識やスキル、態度」である。さらに、それはリーダーシップ・マインドとリーダーシップ・コンピテンシーという2面から捉えられる。特に、リーダーシップ・マインドについては「さまざまな組織や集団においてリーダーシップを発揮する際に必要となる基盤的姿勢・態度」と定義され、そこでは自己と他者との関係性の理解や、グループにおける自分の役割を真摯かつ誠実に果たそうとする態度が求められる。

KED2023のワークショップは、参加学生に対し、実践的体験の機会を提供することが最大の目的であった。どのワークショップを選ぶかは学生の意思に任せたが、DIGにしてもHUGにしても、開始時刻になれば高齢者や中学生を対象にプログラムが開始される。その中であって参加学生は、まず自己と他者との関係性を理解し、次に自分が何をすべきかを認識したうえで、真摯に取り組む必要があった。しかも、そのようなプログラム意図は、午前の基調講演の際の事務連絡で簡単に説明されたのみである。

参加学生の振り返りシートをみると、一部に否定的あるいは消極的な意見も含まれているが、総じて一定水準の満足度の得られたことが判る。UNGLプログラムでは、まず丁寧な手順を踏んで個人目標が設定され、期間中に逐次的ま

図3 【資料1】参加学生の事後アンケート結果の可視化



出所：筆者作成

表1 単語の出現頻度とスコア

■ 名詞	スコア ▼	出現頻度 ▼
防災	150.80	35
行動	5.31	15
確認	2.41	14
意識	3.75	13
災害	11.82	11
対策	4.30	11
準備	1.55	11
避難	9.03	9
中学生	3.70	9
知識	3.20	9
霧困気	1.58	9
避難所	20.24	8
活動	1.77	8
防災グッズ	30.75	7
サポート	1.16	7

出所：筆者作成

たは定時的に振り返りが促されるのが基本である。そのようなプロセスを経なくても、ここで参加学生の多くは、自分が何をすべきかを認識し、それに懸命に取り組むことができた。振り返りシートの記載内容や記述分量からも、それ

は明らかである。ワークショップの有効性については次項で述べるが、以上のようなプロセスが、全体としてリーダーシップ養成に効果があるということは言い得るものと思われる。

6.3 ワorkshop型研修の有効性

- ◆高齢者向けDIG … 3会場の単純比較において、最も雰囲気の盛り上がったのが、このDIGである。対象者である高齢者は、年齢的に孫の世代にあたる参加学生らが「あれこれと世話を焼いてくれる」ことを楽しんでいるようでもあった。一方、大半の参加学生にとっては初めて目にする北九州市のハザードマップであり、尾倉市民センター周辺にかかる土地勘もない。にも拘らず、高齢者は参加学生が一定の防災知識をもっているという前提で質問をしてくる。このため自らの役割をどう設定するかが難しかったようである。それでもアドリブを交え臨機応変に対応した結果が、会場の良い雰囲気に繋がった。その辺りの事情は、参加学生の振り返りシートの記述ぶりからもうかがえる。結果として、KEDのプログラム意図を体現したワークショップとなったが、ここで集積された材料からして有効性に関する精査には至らなかった。
- ◆中学生向けHUG … 3会場のワークショップで、唯一、対象者である中学生の事後アンケートを収集したのがHUGである。それによると、ワークショップにおける満足度が高い水準にあったことが判る。それと連動するかのよう、参加学生の振り返りシートの記述は充実しており、他のワークショップの参加学生と比べ記述量も多い。午前の基調講演と関連させたものもあって、その分、記述量が増えたという面はある。参加学生の多くはHUGを経験するのが初めてであったが、想定された避難所が市民センターや公民館ではなく、中学校であったこともイメージ作りには役立ったと思われる。また、ファシリテータの村岡氏からは専門家ならではの厳しい指摘・指導がなされ、ワークショップの完成度は高いものとなった。参加学生の多くは「フ

ファシリテータ ⇔ 中学生」のやり取りに必死に関わろうとし、それが自身の達成感や満足度に繋がっているのなら、ワークショップ方式の有効性が示されたものといえる。

- ◆ぼうさい絵本の読み聞かせ&防災ポシエット作成 … このワークショップの特徴は、ともに幼稚園児など子供向けのプログラムであったため、内容的には別個のものである「ぼうさい絵本の読み聞かせ」と「防災ポシエット作成」を1つに括った点にある。対象者も子どもと保護者を併せ6名と少数であった。また、ポシエット作成では、この企画の考案者で数多くの活動実績を持つ西谷氏・村上氏が指導に当たった。それゆえ参加学生は、ファシリテータと子どものやり取りに関与するのが難しかったようである。ぼうさい絵本の読み聞かせも同様に、読み手を務めた防災PJの学生をいかにサポートするか、聞き手である子どもにどう関わっていけば良いのか、が判然としない場面も見受けられた。それでも工夫の余地はあったと思われるものの、ワークショップとしては必ずしもKEDのプログラム意図が果たされたとは言えない。

6.4 UNGLプログラムとワークショップとの親和性

ワークショップが、一般には参加者の主体性を重視した体験型学習会であることは既述のとおりである。多くの場合、ファシリテータがサポートして、与えられたテーマや課題について意見交換や共同作業を行う。主役はあくまでも参加者であり、個々の参加者が主体的・能動的に学ぶ姿勢が何より重要である。そして近年、様々なシーンでワークショップが用いられていることから、その有効性は明らかである。

ひるがえって過去のUNGLプログラムにおいては、グループ別やチーム別で体験型研修を実施することが多かった。KEDにしても然りである。それをワークショップ方式と捉えるなら、すでにUNGLプログラムとワークショップとは不可分な関係にあるのであり、両者の親和性について議論の余地は殆ど

ない。また、ここでワークショップ型研修そのものの適否を検討する必要もないと思われる。

とはいえ、KED2023の実施を通じて、ワークショップ方式の有効性が確認されたことの意義は小さくないであろう。これまでのUNGLプログラムでも、ワークショップ方式は幾度となく採用されてきた。しかし、それは1つの研修方式でしかなく、実効性の高い目標設定や、効果的な振り返りを通じたリーダーシップの養成というプログラム目的の前では、特に意識されることがなかったのではないか。

今回、KED2023では、諸事情により3会場で同時にワークショップを実施した。そのぶんUNGLプログラム最大の特徴である目標設定と振り返りが、割愛または簡素化されるという事態となった。そのような「片翼飛行」であっても、ワークショップ方式の有効性が発揮されたことで、KED2023のプログラム目的はおおむね達成されたと考えられる。UNGLプログラムの基本に沿い得なかったことによるデメリットの検証は別稿に譲るとして、少なくともUNGLプログラムとワークショップ方式の親和性が確認されたことは成果の1つとしたい。

7 まとめ

本稿では、九州国際大学による「北九州エマージェンシー・ドリル／KED」を事例とし、学生のリーダーシップ養成を目途とした実践型研修におけるワークショップ方式の有効性と可能性について検討した。スタートから10年となるUNGLプログラムは、すでに一定の教育手法として確立されている。その一方、KEDに限らず他のBasic Programにおいても、ワークショップ的な実践方式が幾度となく採用されてきたのが実情である。

第6節においては、UNGLプログラムとワークショップとの親和性について検討した。その結果、KED2023の取組みの限りではあるが、親和性の高い

ことが明らかになっている。しかしながら、UNGLにおけるプログラム目的と、目標設定・振り返りの効果を高めるという観点からは「どのようなワークショップとすべきか？」について深度ある議論が必要であることは言うまでもない。現にKED2023でも、ワークショップによっては十分な満足度を得られなかった。その逆に、HUGにおいては緊張感を伴う演出の一環として、丁寧な目標設定を敢えて行わないようにするといった判断もあると思われる。

したがって、各種プログラムを通じてさまざまなエピソードを蓄積しつつ、UNGLならではのワークショップのあり方を考えていくことが今後の課題となろう。特にKEDが、地域防災における大学の拠点性発揮と、そこで活躍できる防災リーダーの育成を目指したものである以上、UNGLプログラムとワークショップ方式との有機的結合は不可避であるに違いない。そのことを有意なインプリケーションであると確認して稿を閉じる。（了）

【謝辞】

本研究を行うにあたり、尾倉市民センターの藤本館長ならびにスタッフの皆さま、九州国際大学付属中学校の大峯校長ならびに教員の皆さま、ワークショップのファシリテーターをお願いした皆さま、そして何よりワークショップにご参加いただいたすべての皆さまから多大なるご支援・ご助力をいただいた。ここに記して御礼を申し上げる。

【注】

- 1 第2節の記述にあたっては、以下のテキストを参照した。
鈴木理恵・山内一祥著（佐藤浩章・秦 敬治編集）『UNGLのアンゲルvol.1 ～振り返り手法編～』UNGL教職員部会、2015年3月初版発行。
- 2 UNGLにおける振り返りは「過去の経験を通じて蓄積した自己の思い込み、心情、価値観、知識などに気づき、疑い、それらをより良い他者とかかわりや問題解決行動のために変化させることで、経験を成長につなげるプロセス」と定義されている。これはUNGLの立ち上げに際し、幹事校となった愛媛大学の『ELS』（愛媛大学リーダーズ・スクール）における定義を踏襲したものである。

- 3 前掲の『UNGLのアングルvol.1 ～振り返り手法編～』では、望ましい目標設定について次のように解説している。例えば「チームメンバーの話を聞く」という目標では、目標設定をした本人が、達成できたかどうかを判断する基準が明確でない。これを以下のように表現すると目標が数値化され、具合的な行動基準が明確化する。
- ・チームメンバーの話を聞くために、話の内容を復唱して確認をする。
 - ・チームメンバーの話を聞くために、傾聴を意識し1人5分ずつ話す。
- 4 第3節3.5項の記述にあたっては、以下のサイトを参照した。
「ワークショップとは？ 目的や種類、効果的な進め方のコツをわかりやすく解説／ワークショップ」『IKUSA公式サイト』株式会社IKUSA、2023.12.28.ダウンロード。
- 5 本稿における分析、言語データの可視化(図1)、及び集計(表1)には、ユーザーローカルAIテキストマイニングツール(<https://textmining.userlocal.jp/>)を用いた。使用日：2024年1月31日。
- 6 本稿「4. KED2023の概要」を参照されたい。
- 7 Cf. User Local AIテキストマイニング「Q&A」
(https://textmining.userlocal.jp/questions#data_q2) 閲覧日：2024.1.31.

【参考文献】

- 渥美公秀・三隅二不二「所属集団からの排斥不安とリーダーシップが討議集団における情報処理に及ぼす効果」『実験社会心理学研究』28、pp.143-154、1989
- 野間川内 一樹「リーダーシップ教育の学生スタッフ育成に関する研究」『日本教育工学会研究報告集』2023 (3)、pp.188-195、2023.10
- 三神 圭「リーダーシップ教育を軸にした人材育成に係る組織マネジメントの研究 ～メンタリングを活かしたヤングリーダーの育成～」『教育デザイン研究／Journal of education design』14 (3)、p.46、横浜国立大学教育学研究科、2023.1
- 三隅二不二『リーダーシップ行動の科学』有斐閣 1978.11
- John P. Kotter『リーダーシップ論：第2版』DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部、翻訳：黒田由貴子・有賀裕子、2012.3
- Luft, J. and Ingham, H. "The Johari window, a graphic model of interpersonal awareness". Proceedings of the Western Training Laboratory in Group Development. Los Angeles: University of California, Los Angeles. 1955

【資料1】参加学生の事後アンケートの結果

－質問事項－

- ①これまで、防災に関してどのような意識を持っていましたか？
- ②今回のKED2023を通じて、防災への意識に何か変化はありましたか？
- ③今後、あなたの具体的な防災行動について教えてください。
- ④ワークショップの雰囲気はどうでしたか？
- ⑤ワークショップで、あなたはどのようなサポートをしましたか？
- ⑥防災活動におけるリーダーシップとは、どのようなものと思いますか？

－回答－ ※回答者名の後のカッコ書きは、選択したワークショップ。

◆大学生A（高齢者向けDIG）

- ①今までは防災に関してあまり意識的なことを行っていなかったが、今回のKEDを経て意識をすることの中身が変わった。
- ②防災について日頃から意識していこうと思った。
- ③今後は、まず自分の部屋などに、災害時に危険になるものはないかのチェックをしようと思う。
- ④皆さんが真面目に取り組んでくれていて、とてもスムーズに進行できた。
- ⑤ちゃんと理解できているかの見回り。締め挨拶。
- ⑥自ら進んで防災活動をすることにより、それに周りの人も巻き込んで、皆で防災活動に取り組めるようになることではないかと考える。

◆大学生B（高齢者向けDIG）

- ①今までUNGLの経験を通して、ある程度は認識できていたと思う。
- ②自分が認識しているだけでは足りない。周りの人々に伝えていくべき。
- ③自分のもっている知識や理解を他者に伝え、1人でも多く生き残る事ができるようにする。
- ④皆さんとてもフレンドリーで接しやすく、滞りなく進められた。
- ⑤参加者の方々が判らないところを一緒に考えるなど。
- ⑥災害による被害を自前の準備によって最小限に抑え、自身だけでなく周囲の人間にも安心を与えること。

◆大学生C（絵本読み聞かせ&ポシエット作り）

- ①あまり、これといった知識はなかった。
- ②変化はあった。いつ起こるかわからないので、何が起きても対処できるように非常用具のリュックなどを準備しようと思った。
- ③避難所や連絡先の確認など、しっかりしようと思った。

- ④子どもたちが、興味津々に読み聞かせを聞いてくれていたので嬉しかった。
- ⑤少しでも防災のことに関心を持ってもらう為、聞き取りやすい声や速さで絵本を読んだ。
- ⑥防災についてしっかりと学び、それを身近な人に伝え、関心を持ってもらうために行動するもの。

◆大学生D（絵本読み聞かせ&ポシエット作り）

- ①日頃からあまり意識していなかったが、ポシエット作りなどを通じ普段から準備をしておこうと思った。
- ②災害被害の経験があまりなく自分は大丈夫だと思っていたが、今回のKED2023で、普段の準備が災害時の被害を抑えたり、不安を1つでも消してくれるのだと思った。
- ③非常袋の準備をしておこうと思った。
- ④明るい雰囲気が進められていたと思う。
- ⑤ポシエット作りのセッティングや、紙芝居を読みやすくするよう手伝った。
- ⑥防災に関する知識を自発的に発信し、周りの人の防災意識を上げることだと思う。

◆大学生E（中学生向けHUG）

- ①災害が起きたら、政府が助けてくれる。
- ②防災とは、災害が起きる前に防ぐ事だと判った。
- ③防災に適した家を作るのが一番いいと感じた。
- ④参加者が防災に関心を持って真面目に参加している。いろいろ参加者の意見を聞いて視野が広がった。
- ⑤サポートというより、中学生と共同して、提案したり問題を解決したりした。
- ⑥防災のこときちんと理解し、予防する活動を展開すること。

◆大学生F（中学生向けHUG）

- ①北九州であまり災害が起こらないが、油断しないほうがいいと思う。
- ②今回のKED2023を通じて、パニックになっているときに、避難のガイドをすることがいかに難しいかを知った。
- ③トイレのことを検討するのが一番だと思う。危険物がある部屋に入らない。
- ④久しぶりに中学生たちと一緒にになり、防災のために色々なアイデアを出し合ったことが本当に楽しかった。彼らが多くの鋭いアイデアを出していて、これからもっと凄くなると思った。
- ⑤中学生たちがアイデアを出した際、自分として「これはどうかな・・・？」と考えること。
- ⑥もし地震が起こった場合、自分では、避難者をちゃんと誘導できると思う。

◆大学生G（絵本読み聞かせ&ポシエット作り）

- ①大きな地震を経験した事がなく、地震や防災に関してこれまで意識して行動した事がなかった。防災が重要な事であるという認識はあったが、地震が起こった時、自分がどのように行動するべきかという考えは持っていなかった。
- ②地震発生後のことを考えるより先に、起きる前に被害を防ぐ事が大切だという認識ができた。いつ起こるかわからないという言葉に、他人事ではないんだという意識が持てた。
- ③自分の部屋の棚の配置や固定方法を見直す。避難地所を確認して家族と共有する。防災グッズに何が必要か確認して準備する。
- ④堅い感じではなく、楽しみながらワークショップができていた。小さい子ども相手に活動することが多いと思うので、ゆったりしたやわらかい雰囲気だった。
- ⑤ポシエット作りが早く進められていたので、見本になった。
- ⑥防災についての知識を深め、もっと多くの人たちに防災の大切さを広めること。そして、広めるための活動を実際に行うこと。

◆大学生H（絵本読み聞かせ&ポシエット作り）

- ①災害はいつ起こるか判らないからこそ、当事者意識が薄かったと思う。ニュースや新聞で取り上げられているのを見ると「怖いな」とは思ったけど、ただ思うだけで、実際にそのリスクへの対処を行っていなかった。やらなければと思いつつ、心のどこかで自分は大丈夫だろうと思っていたのだと思う。
- ②災害がいつ起きても対処できるように、今から自分にできることをするのがとても大切だと思った。水を用意しておくことや、ハザードマップの確認、必要な防災グッズをそろえることなど、すぐにできる事は多いので、これらの徹底をしていきたい。
- ③水や防災グッズの用意、ハザードマップの確認に加え、自分の部屋の耐震強化や避難所・避難地の確認など「自助」を中心に防災に取り組んでいきたい。また、今まで当たり前に行われていた避難訓練に、果たして意味があったのか、実際に役立つものだったのか、を振り返ってみる。そして「足りない」とか「間違っている」と感じたものに対して、新たに対策していきたい。
- ④始まる前に、防災の意味やなぜその活動を行っているかをファシリテーターの方が熱心に説明してくれたので、こちらもその気持ちに応えようという気になった。しかし、堅苦しい感じではなく、明るい雰囲気を楽しみながら取り組むことができた。
- ⑤少し作業が遅れている人や説明がわからなくて困っている人に、積極的に声をかけて助けることができたと思う。
- ⑥防災活動を行う目的、重要性を周知させ、1人でも多くの人に正しい知識を広められるような力。1人でも多くの人が、防災意識を高められるように働

きかける力。

◆大学生 I（中学生向け HUG）

- ①私の実家では洪水が毎年のように起こっており、それに慣れてしまって、防災に対する意識が年々薄くなっていた気がする。また、関西在住なので、南海トラフの対策をしなければと思うつつ行動には起こしていなかった。
- ②自助の重要性をとて感じた。自らの防災への意識を高め、行動に移すことによって、他人にかかる迷惑を減らす事ができると学んだ。まずは、自助についての防災に取り掛かりたいと思う。
- ③住んでいるアパートがどれくらい対策されているか。家具の固定。避難所、避難経路の確認。
- ④行き詰ることもありつつ、全員が積極的に意見を出し合い、にぎやかに進んでいた。
- ⑤アイデアがなかなか出ないときや、各自が違う意見を持っていてまとまらないときに、「こうしてみたらどうだろう？」というアドバイスを出した。
- ⑥混乱が起きている中で的確な判断をし、周りに伝えることができる力。

◆大学生 J（中学生向け HUG）

- ①防災について事後での対策をメインに考えていたが、よく考えてみたら、それは全て手遅れであることに気づいた。やらなければいけないと思いつつ、後回しにしていたと痛感した。移動する事が避難だ。
- ②その場所で暮らす、遊ぶ、働くにしても、全ての身を預けられるほどの安全性があるかの確認が必ず必要だと考えた。事前に「自分の命は自分で守る」ことがどれだけ大事かを考えさせられた。移動することでなく、それまでの対策こそが防災であり避難だ。
- ③自宅の棚や家具が倒れないか、寝ているときに地震がきたら・・・などの確認とその対策を実施する。どのような状況でも、自分自身の命を守る事が大切。自身の場所は自分で創っておくこと。
- ④ワークショップは、説明ばかりではなく実践系。グループでは、とても活発なコミュニケーションが図られて、自然と会話が生まれるような雰囲気だった。その1人として、身近なもの（制服や使っているシャープペンなど）を中学生とのコミュニケーションの切っ掛けにすることで、少し距離が近くなったような気がした。
- ⑤「誰もが過ごしやすい場所にする、わかりやすい説明をする」ことモットーにした。チームの中学生が行き詰った時には、「この人たちにはどうかな?」「いやな思いする人は?」などのヒントを出した。決め事が多かったので、「まず、何から取り掛かるか?」などの声をかけサポートした。

- ⑥私は、事前の対策（本当の防災）を自己で実施し、それを周りの人（近所、親せき、友達、会社）に自分の言葉で伝えていくことだと思った。そして故郷を離れるというという行動も、これに含まれるのではないかと感じた。

◆大学生K（高齢者向けDIG）

- ①南海トラフに備えて私自身、何か準備しておかなければならないと思いつつも、なかなか行動できていなかった。
- ②今まで「特攻精神」が良い物だと思っていたのだが、村岡先生のお話を聞いて、防災の観点ではこの精神はなんの良い効果ももたらさないという事がわかった。私自身、他人を踏み台にするような行動をさせないようにしようと考えが変わった。
- ③まず、ツッパリ棒でタンスや食器棚を固定し、危険が生じないようにする。
- ④最初は何をすればよいかわからず、あたふたしてしまった。村岡先生にやるべきことを聞いた後は、温かい雰囲気ですすめることができてよかった。そして、この雰囲気は、どのようにしたら作れるかを改めて考えたいと思う。
- ⑤参加して下さったご年配の方々が不安な気持ちにならぬよう、今、何をしたらいいのかについて積極的に伝えた。そして少しでも楽しんでいただけるため、堅くなりすぎないように話してみた。
- ⑥災害に対しての備えを積極的に広めていけるよう、お互い助け合うのがリーダーシップなのではないのかなと今日のワークショップを通して感じた。

◆大学生L（高齢者向けDIG）

- ①学校の授業などで教わることはあったが、大学生になって考える機会がなかったので、意識しては生活してこなかった。
- ②災害が起こってからでは遅いことに気づかされた。事前準備が自分や大切な人を守るので、しっかり備えていきたいと感じた。意識を高く持つという抽象的な対策ではなく、本当に効果のある行動をとっていきたい。
- ③防災グッズが入ったリュックは持っているが、非常食やタオル、水などが入っていないので、準備したい。また、1人暮らしをしている京都の避難所や避難地がどこなのか確認したいと思う。
- ④気さくな方々が多く、明るい雰囲気だった。ワークに一生懸命取り組んでくださったので、私も皆さんと一緒に防災について考える良い時間だった。
- ⑤皆さんの家具の配置や間取りを共に確認し、災害時にどのような危険があるのか考察して改善策を提案した。また、雑談を交えながらワークに取り組むことで、楽しく防災について考えた。
- ⑥自分の命を守るための事前行動を行うこと。逃げる意思をもち、大切な人たちを支えながら災害時は取り組む。

◆大学生M（中学生向けHUG）

- ①避難所に世話になるのが当たり前と思っていた。
- ②家を大事にしようとした。対策をしようとした。
- ③色々と飾っているケースの、防災グッズを新しくしようとする。防災グッズを家に置いておく。
- ④楽しく話し合えた。防災に対してどうしたらいいのか考えながら学べた。
- ⑤問題点を言い合ったり、意見を出しやすいようにする。
- ⑥自分の命は自分で守るしかないことが判った。そして他人を思いやる気持ちや知識、余裕があればいいと思った。

◆大学生N（絵本読み聞かせ&ポシェット作り）

- ①防災に関する話題をテレビで見たり、人の話を聞いたりした時に考えることとして捉えていた。普段から何かをするほど意識はしていなかった。
- ②これまで学校などで話を聞いたり、避難訓練をしたりする機会はあったが、その訓練からどんな結果が出るのか、本当に「意味のあること」として行われていたのかについて考えたことはなかった。そのため、防災について何かを行う側になったとき、目的や結果となることをよく考えた上で行わなければならないという意識が持てた。
- ③倒れてきそうな背の高い家具が、家のどこに配置されているか確認すること。キャスターのついている物が広い場所で人の通る道に置かれていないか確認すること。それらを見つけたらどんな危険があるかを考え、家族に伝えて移動できるように働きかけたい。
- ④少人数だったため、困ったときにはすぐに声をかけて、頼りやすい雰囲気だった。講師の方の話も分かりやすく、行っている活動に対しての熱意や理由がよく伝わってきたと感じた。
- ⑤自分からサポートは特にできなかったが、お菓子ポシェット作りをしている中で、隣の学生に次は何をするのか教えてもらったり、見本を見せてもらったりした。
- ⑥必要になる行動や準備するべきことなどをよく知っておくことや、その知識で気づいた点を周囲に共有し、率先して行動を提案していく力だと思う。

◆大学生O（絵本読み聞かせ&ポシェット作り）

- ①非常時をイメージして、常日頃、何か対策しておかなければと思っていました。何をすれば良いか判らない状態だった。
- ②特に変わらなかった。
- ③防災グッズ一式はひとまず備えておくべきかな、と思っている。
- ④あんまりパッとしない雰囲気、少し気まずい感じ。よくわからない空気感だった。

- ⑤何もしていない。サポートされる側というだけだった。
- ⑥今回のドリルを通しては、考えたり実践したりすることが無く、一方的で受動的なものだった。特に、思うことはない。普通に考えるなら、万一の時、冷静に適切な行動ができること。自分以外の人や全体に気を回し統率が執れる行動力だと思う。

◆大学生P（中学生向けHUG）

- ①今までは、自分の家を避難先にする発想や、自分の家の災害への耐性は自分の対策でどうにかなると思っていた。だから「防災＝避難用バッグの準備」で、倒れないような家具を選んで満足していた。
- ②自分の家を失わないという発想はあまりなかったです。避難所について知り考えたことで、避難所に頼らない防災をしなければいけないという考え方になった。
- ③帰ったら、まずは家の中の危険を確認し、家を安全な空間にしたい。
- ④中学生の子たちは、難しいと思っても考えるのをやめず、アイデアを出しあっていた。
- ⑤問題がでた時に、話し合いが止まってしまったら、いくつかの解決策の選択肢やヒントを出し、できるだけ中学生たちの力で話し合いが進むようにサポートした。
- ⑥目先のことでなく、数日後、数週間後の生活と、失いたくないものは命だけではないことなど、広い視点で考え、動けること。

◆大学生Q（中学生向けHUG）

- ①知識をもっていない人たちに、ただ知識を発信していく事が大切であるという意識。
- ②単に教える、実践するのではなく、いざという時に使える訓練、使える考え方を教えていく必要があると感じた。
- ③ふだん小中学生の防災教育をサポートする機会が多いので、村岡先生に教わった災害への備え方を大切にして防災教育を行っていきたい。
- ④中学生たちが真剣に一生懸命取り組んでくれていた。自分たちのアイデアを取り入れたり派生させたりして、少しでも使いやすい避難所の設計をしていた。
- ⑤車いすなどハンディーを持った人をどのように配置するかなど。このような場合、どのようにすれば良いか答えを出すのではなく、中学生に考えさせるサポートをした。
- ⑥自らが実践的なスキルを身につけ、考え、発信し、行動していくこと。

以上

【資料2】HUGに参加した中学生の事後アンケート結果

－質問事項－

- (1) これまで、防災に関してどのような意識を持っていましたか？
- (2) 今回のワークショップで、もっとも印象に残っていることは何ですか？
- (3) ワークショップを終えて、あなたの防災意識はどう変化しましたか？
- (4) 今後、あなたが具体的に取り組みたい防災活動があれば教えてください。

－回答－

◆中学生A（第1班）

- (1) もし何かあれば小学校などに避難すればいい。そう思っていた。
- (2) 1つの場所を決めるのにすごく時間がかかってしまった。1つ決め、さらにもう1つ決めようとしたら、先に決めた場所が邪魔になってしまったところが難しかった。
- (3) 何かあれば・・・ではなく、何があっても大丈夫のように、災害に強い家や場所を確認しようと思った。
- (4) より安全な場所と、耐久性が優れた良い家を見つけたいと思った。自分が大丈夫であれば、運営側として学んだことを活かしたいと思う。

◆中学生B（第1班）

- (1) あまり防災について知らなかったので考えたことが無かった。
- (2) 避難所に行けば大丈夫ではなく、「避難所に行かなくても大丈夫という状況を作れることが本当の防災」という言葉が印象に残っている。
- (3) これまでは災害が起きたら避難所に行けば安全だと思っていた。このHUGを通して、避難所の実状がとてもよく分かった。
- (4) 災害が起きても避難所に逃げなくていいよう、住む地域や家づくりをしたい。

◆中学生C（第1班）

- (1) 災害が起こる前に、自分で備えていた方が良いもの。
- (2) グループでの活動。
- (3) もっと嚴重に防災活動を行いたい。
- (4) 自分の部屋の家具の固定など。

◆中学生D（第1班）

- (1) 何か起これば、とりあえず避難所へ逃げれば良いと思ってあまり考えていなかった。
- (2) 地震の時、避難所により早く行くのではなく、逃げなくても良くするため事

前に家を守ることの方が大事だということ。

- (3) 家を守ること、自分たちも良い環境で生活できる。空いた時間に避難所の手伝いができるので、家を守っていききたい。
- (4) 今回、教えてくださったことを、参加していないクラスの人や家族にも伝えていきたい。

◆中学生（第2班）

- (1) 防災イコール危険でなくなったり、家を失わないようにする。これ以外、あまり考えたことがなかった。
- (2) みんなで避難所の部屋割りや、誰もがわかりやすいように掲示物をかくこと。
- (3) 日ごろから考えることが大切だと思った。また、将来、家を失わないために、その地域の安全な場所で家を施行したい。
- (4) 今回あったような避難所運営。地域のハザードマップを確認したりする。

◆中学生F（第2班）

- (1) 今まで被害にあったことがなかったので、あまり危機意識を持っていなかった。
- (2) 自分達で避難所の通路を考えることが難しく、印象に残った。他にも、どうすれば多くの被災者を受け入れることができ、どうすれば全員が快適に生活できるのかを考えるのが難しかった。
- (3) 災害が起こってから対処するのではなく、災害が起きる前に、防災をする事が大切だということを学んだ。自分で自分の身を守るためには、普段から大雨や地震が起きるかもしれないと注意して生活しようと思った。
- (4) もし災害にあった時のため、避難場所や避難経路を確認しておく。防災グッズを買う。

部屋の家具が倒れないか確認する。

◆中学生G（第2班）

- (1) もし災害がおこったら、早めに避難所に行けば自分の身が守れる。だから避難警報が出たら準備をして避難所に行けばよい、と思っていた。
- (2) 避難所運営ゲームで、体育館やグラウンド全体の図を使い、付箋をはって、どのように運営するのかを考えたことが印象に残っている。
- (3) 避難所について、災害が起きた時に行けばいいところだと思っていたが、避難所に行かなくてもいいように災害対策を練ることが大事だと思い直した。
- (4) 大人になって家を買う場合、先生が言っていたように、災害の被害が少ないような地域を調べて決めたいと思った。

◆中学生H（第2班）

- (1) 将来起きるといわれている南海トラフ地震や、これからの豪雨災害に備えて、防災用品などを揃えていく必要があるという意識を持っていた。

(2) 避難所をどのようにするのか、どこに何のブースをおくのかを考えるのが難しく、印象に残っている。

(3) これまで以上に、自分の身は自分で守らないといけないと思った。防災への備えを確実にしたい。

(4) 家の防災用品を点検して用意すること。

◆中学生 I (第 2 班)

(1) 自分の家は災害を受けにくいところにあつたので、災害に対して心配したり、防災をしようという意識があまりなかった。

(2) 避難所の体育館では、通路を作って整備しなければいけないが、収容人数が少なくなり、更に女性や障害を持つ人への配慮など色々な立場で考えなければならず難しかった。

(3) 家の場所よりもまず災害のことを第 1 に心配し、万が一に備えることが大事だと思った。特に地震に関しては、家具の配置や耐震性に気を付けていきたい。

(4) 大雨の場合、家族の集合場所を決めておく。非常食は定期的に食べて慣れておく。携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品を準備する。地震の場合、避難所に行かなくてもいいように、上記(3)で述べた対策をする。

◆中学生 J (第 3 班)

(1) あまり、自分自身が地震や津波などの自然災害にあつたことがなかったので、防災についての関心は薄かった。防災は、地震や津波が起こった後のためのもの思っており、自然災害の少ない地域に住んでいる自分は、防災の準備が少なかった。防災は、自然災害が起きた後のことと考えていた。

(2) 避難所の設計がとても難しかった。これをここに設置したら・・・と考えると、たくさん問題点が出てきて、トラブルなども起こってしまうかもとなり、場所を決めるのはとても難しい。設置だけでなく、封鎖についても、学校内の施設の封鎖であれば、そのぶん避難場所が減ってしまい、できるだけ多くの人が避難できるよう工夫するのが大変。

(3) 防災は自然災害がおこった後のことと思っていたが、それ以前でも、避難所に行かなくても済むよう準備をしようと思った。また、防災について家族と話してみたい。ハザードマップや避難経路を確認したり・・・。大人になって家を買う時も、地震が起きたり津波が来たりしても、危険ではない安全な場所を選ぼうと思う。工夫して選びたい。

(4) 避難場所の確認、ハザードマップや避難経路の確認、地域の避難訓練への参加。

◆中学生 K (第 3 班)

(1) 地震や水害などが起きたら、少しでも早く近くの避難所など安全な所へ行く。

- (2) 避難所は運営がとても大変で、清潔ではないことや、盗難などの危険性もあり、ストレスがたまる場所であったこと。
- (3) 速く避難所に行くことを考えるだけでなく、家を守るための取組みをすることが大事。
- (4) 家を守るための取組みとして、自分が家を買うときは耐震性の高い家、被害が少ない地域を選び、家具の固定位置の変更などをしていきたい。

◆中学生L（第3班）

- (1) 家が川に近いので、大雨の時は避難を考えている。猫を飼っていて避難できないので、2階への垂直避難をしている。
- (2) 避難所は、ただ小学校で開設するのではなく、ちゃんとここを封鎖するなど決めてするのが大切なんだと思った。
- (3) 何かがあったら避難所に行くと思っていた。地震の場合、家を事前を守り、それがダメであれば避難所に行くということを知ることができ、とても良かった。避難所は住みにくそうだったので、しっかり家を守り、できれば家で暮らしたい。
- (4) 水害の時はどういう風な対策をすればよいのか。犬、猫と一緒に避難できる避難所をつくってほしい。

◆中学生M（第4班）

- (1) 災害が起きたら避難所に行った方がいいと思っていた。
- (2) 避難所ではトイレが使えなくなる可能性があるということ。避難所では盗難事件もあるということ。
- (3) ずっと避難所に行ってみたいと思っていたが、今回、沢山のことを学んで、避難所には行きたくないと思い直した。
- (4) 大人になった時に家選びをしっかりとりたいと思う。

◆中学生N（第4班）

- (1) 災害などで「やばい」と感じたら、避難所に逃げようと思っていた。
- (2) みんなでワイワイして、地図に沢山の意見を書いたこと。
- (3) もし自分が1人暮らしをする時には、防災対策を失敗しないよう気をつけたい。
- (4) 今、自分の家や身の周りにある危険を見つけ、将来の自分に役立てようと思った。

◆中学生O（第4班）

- (1) あまり必要のないもの。
- (2) 割れて落ちたガラスや薬品等の危険性を考えて、部屋を使わなければならないこと。

(3) できるだけ災害への対策をしていきたいなと思った。

(4) 防災全般。

◆中学生 P (第 4 班)

(1) 雨や地震で自宅が住めない状態になっても、避難所に行けばどうにか助かる。

(2) 地震の時、避難所が意外とあてにならず、避難所には危険がいっぱいあるところや避難所運営の難しさなどが分かった。

(3) 避難所が意外と当てにならない以上、自宅を守る防災をしなければならない。

(4) 自宅の防災バッグなどをいま一度確認し、不備があれば買い揃える。

以 上

【資料3】エクスカーション資料「屋内危険性チェック」

(出所：清流の国ぎふ 防災・減災センター)

清流の国びさ 防災・減災センター 地震対策 Check 屋内危険性チェック

ステップ1 チェックする部屋を選ぶ

居間、台所、寝室、子ども部屋、風呂場、玄関・廊下及び職場、公民館など

ステップ2 下図の描き方

- ①窓やドアの位置を描く
- ②家具(机、机、ベッドなどの置き場所を描く
- ③壁の上に置くガラス製品などの物品位置に印をつける
- ④照明やエアコン、車庫の付いたクワンやコピー機の置き場所を描く

記入例

記入例の図は、部屋の平面図を示しています。壁、窓、ドア、家具（机、机、ベッド）、ガラス製品（花瓶、鏡）、照明、エアコン、クワン、コピー機などの位置が描かれています。各項目は番号で示されています。

- ① 窓（壁に矢印で示す）
- ② 家具（机、机、ベッド）
- ③ ガラス製品（花瓶、鏡）
- ④ 照明（ペンダントライト）
- ⑤ エアコン（壁に矢印で示す）
- ⑥ クワン（壁に矢印で示す）
- ⑦ コピー機（壁に矢印で示す）

ステップ3 下図を描く

① 居間・台所

② 寝室

③ 子ども部屋

④ その他

ステップ4 危険な範囲に斜線を描く

棚などの転倒、照明落下、窓ガラスの飛散範囲など

(注1) 棚などの転倒の場合、家具の高さと同程度に矢印を付けると、

下敷きになる範囲が分かる

(注2) 車庫付のクワン、冷蔵庫、コピー機などの移動範囲にも印をつける

[illegible]